第7回　北九州市孤独･孤立対策等連携協議会　会議録

１　開催日時
令和６年４月２４日（水）　１１時００分～１２時００分

２　開催方法
オンライン開催

３　出席者等
（１）参加団体（敬称略、五十音順）
◆ＮＰＯ法人老いを支える北九州家族の会
◆公益財団法人 北九州国際交流協会
◆北九州市子ども・若者応援センターＹＥＬＬ
◆社会福祉法人 北九州市社会福祉協議会
◆北九州市障害者基幹相談支援センター
◆北九州市ひきこもり地域支援センター「すてっぷ」
◆認知症・草の根ネットワーク
◆ＮＰＯ法人 フードバンク北九州ライフアゲイン
◆福岡県協力雇用主会
◆ＮＰＯ法人 抱樸

（２）行政関係者
保健福祉局地域共生社会推進部長、地域福祉推進課長、
地域福祉推進課孤独・孤立対策担当係長

※議事に記載している意見等の標記について
◆・・・参加団体　　◇・・・行政からの回答等

４　議事内容
（１）行政からの説明「令和５年度 内閣官房 地方版孤独・孤立対策官民連携プラットフォーム推進事業について」

地域福祉推進課長より、資料１「孤独・孤立対策に関する地域連携推進モデル調査事業最終報告会　中国、九州地域ご報告資料」に沿って、昨年度実施した事業概要を説明。当事業を活用し、本協議会の事務局機能の一部を、北九州市社会福祉協議会に移行、内容の企画などを一緒に考えた。今年度についても、昨年度同様、北九州市社会福祉協議会に本協議会の企画に携わってもらうとともに、より幅広い知見の活用・連携強化を図るため、本協議会に参加する他の機関も企画に関わっていけるよう、取組みを進めていきたい旨、伝えた。

【主な意見】
◆　昨年度､行政と北九州市社会福祉協議会の共同という形で､事務局運営に参画をした。
企画運営に携わった感想として、顔の見える関係性が構築され、その中で考え方を共有したり、すり合わせていったりと、行政と市社協の得意とするところを、互いに出し合って、運営できた点が良かったと感じている。

◆　連携や垣根を越えた活動が大切という話が先ほども出ていたが、何でそうしないといけないかという点を考えると、私たちは、こういう団体さんがあるということは知っているが、実際にその団体さんの事務所に行ったことがないとか、窓口の様子がどんな状況か分からないということが多々あると思う。このような状況で、閉じこもりがちな方に、「こんな団体がありますよ」と紹介して本当に大丈夫なのかということが、そもそものきっかけで、昨年度は、実際に活動している方たちで、顔の見える繋がりづくりを実施した。

　このような取組みをコンスタントに実施し、集まる場を作らなければ、他団体に繋げたい方がいたときに、悩んでしまうので、支援現場に関わる人たちが繋がるコンテンツを今後作っていけたらいいと思う。

（２）行政からの説明「孤独・孤立対策推進法について」

　地域福祉推進課長より、資料２「孤独・孤立対策推進法」に沿って、法の概要・ポイントを説明。特に、官民連携プラットフォームと地域協議会の位置づけについて説明した上で、北九州市の対応を説明した。

　また、第五条には国民の努力も規定されており、一国民として改めてご承知いただきたい旨伝えた。

（３）行政からの説明「孤独・孤立対策強化月間について」

　地域福祉推進課長より、資料３「孤独・孤立対策強化月間」に沿って、強化月間における取組について説明し、機運醸成のため、ポスター掲出やロゴマーク等の活用にご協力を依頼した。

【主な意見と事務局回答】

◆　顔の見える関係者の連携について、昨年初めての試みとして支援団体の連携を目的に、バスツアーがあったが、現場で直接担当者から具体的な説明を受け、一緒に見学する人同士でも会話ができ、非常にタメになった。

　引き続き、顔の見える関係性を作り、協議会の中で、皆さんと連携ができればと思う。

　今、北九州市の協力雇用主は、288 社あるので、この関係をどのような形で広めていくかを、引き続き一緒に考えていきたいので、どうぞよろしく。

◇　今後、協議会の皆さんでコミュニケーションをとることのハードルを下げたいと思っており、コミュニケーションツール等を活用し、より気楽にコミュニケーションが図れる仕組みづくりをしていきたい。

◆　昨年度は、バスツアーや研修会などのイベントを通して、協議会の方たちと顔の見える関係を作る機会がたくさんあったと思うが、その関係性をいかに日常に落としていくかが大切だと感じる。そこで、日常の関係性を作る際に、ラインなどのツールを使い、双方向のコミュニケーションが図れる方法があれば良いと思う。また、支援者側が悩んだり困ったときに、定期的に集まれる場があればと思い、この１年でさらに横のつながりを広げていけたらと思う。

◆　内閣府主導で、５月の孤独・孤立月間に電話相談（＃9999）を実施するが、今回はメタバースを使うということで話しが進んでいるものの、５月と１２月のみの実施となる。孤独・孤立と言っているわりには、相談のタイミング自体が孤立している状態だと感じ

ている。
　実施月の限定が常態化される中、結局大切になってくることは地方版プラットフォームだと思う。全国で相談を受け付けて、コーディネーターに繋いでいき、電話やSNSで相談を受け付けているが、国レベルで年２回、１～２週間実施しただけでの孤独・孤立の解消は難しく、その地方版が必要で、実際の支援を担っていくと思っている。
　北九州市は、国のプラットフォームができる２週間前にすでに本協議会を立ち上げたという歴史もあり、国はとても注目をしていると思う。
　国の分科会では、第３分科会で個別の相談体制の構築について議論をしているが、やはり個別相談は電話相談となっている。一方で、孤独・孤立の問題は日常にある問題。従来の地域社会であるとか、家族をベースとした社会構成が変化している中で、地域での日ごろからの繋がりづくりが重要になるだろう。そういった状況を見越して、地方版プラットフォームを上手に活用しながら、地域共生社会をどう作るか、また重層事業とどう連携していくかが肝になると感じている。
　最後に、北九州市におけるつながりサポーターの活用について伺いたい。

◇　今年度、内閣府からお示しいただけると聞いており、その内容を踏まえ考えていきたい。

◆　今日の会議に、業務の都合により参加されていない団体さんもいらっしゃるが、以前他団体のご担当者より「私たちは、協議会の他団体と比べたときに、実際に現場で動いているものではなく、守秘義務を守りながら電話相談を受け付けているので、支援者同士の交流は難しいと感じている」とおっしゃられた。一方で、各団体に関わっておられる方々の層の厚さや役割を考えたときに、どのように連携ができるか、今具体的な施策は決まっていないが、この連携協議会に関わってよかったと思えるような、また自分たちは大きな役割を担っているんだと実感できるような内容が、今年度実現できたら良いと思っている。
　つながりサポーターについて、国がどのように打ち出してくるかにもよるが、やはり最終的には全国ではなく地域における連携会議などのネットワークが重要視されると思う。その中でも、身近な地域の中で、孤独・孤立の問題を日常で防いでいけるかは、つながりサポーターがどのような役割で、実際動いていけるかということに、とても期待をしている。つながりサポーターと似たような制度として認知症サポーターがあるが、認知症サポーターは講習を受ければサポーターになることができる一方で、実際に活躍できているか不明である。以前、自治会の担当部局より、自治会が崩壊しないように守るためには、どのような取組みがあるだろうかと相談を受けたが、その取組みの一つとして、つながりサポーターが役目を担うのではと思っている。つながりサポーターが、高齢者だけでなく、子育て世帯も巻き込み、それぞれが役割を担うことができたらよい。
　つながりサポーターを国が定義してくるとは思うが、北九州市独自で、地域の崩壊を防ぐ方法の一つとして、本協議会でどのようなつながりサポーターの枠組みを作るかについても、議論ができたら良いと思っているので、引き続きよろしくお願いしたい。

◇　北九州市では、いのちをつなぐネットワークや、市社協さんの取組みとして福祉協力員も何千人といらっしゃるので、既存の枠組みとも関係性を整理しながら、考えていく必要があり、その点が北九州市独自の課題というところになるかと思う。

今日は、お忙しい中ご参加いただき、ありがとうございました。今後も、集まって話しをする場を頻繁に作っていければと思っているが、毎回参加する必要はなく、参加したい時・話したい事があるときだけ参加するといった、ハードルの低い場を作っていけたらと思っているので、引き続きよろしくお願いしたい。